

ベルリン 3日目-2

「緑の森」に残る戦争の「記憶」 —死の17番線ホーム—

ポツダムからの帰路、ちょうどベルリンとの中間ぐらいの位置にグリューネワルド(Grünewald)駅がある。そのまま訳すると「緑の森」(grün + Wald)。

その名の通り、周囲には木々が生い茂っており、ベルリンっ子にとって憩いの場だ。高級住宅街でもある。



私はこの「緑の森」にあるナチズムの痕跡にどうしても先生を案内したかった。

「先生にみせたいものがあるのです。ここで降りましょう。」

それは通称「死の17番線ホーム」

ここから多くのユダヤ人が、貨車につめられて強制収容所に送られた。

いまは使われていないホームには、一面に鉄板がしきつめられている。

そしてその一枚一枚に列車が発車した日付、目的地とのせられたユダヤ人の数が刻まれている。

記録が曖昧なものもあるせいか、100人、1000人というアバウトな数字しか記されていない板もある。また行く先がないものもある。狭い貨車の中で亡くなってしまったのだろうか……

刻印されている行先は、東方の強制収容所が多い。当然、これから向かうアウシュビッツも含まれる。

私たちがアウシュビッツに行くのだ。それもその前日にベルリンにいるという巡りあわせのもとに。

だからこのホームはどうしても訪れなければならない場所、私はずっとそう思っていた。



右の鉄板には「1942年9月8日／100人のユダヤ人／ベルリン—チエレジエンシュタット(チェコにあった強制収容所)」と記載されている。sano(c)



saita(c)

下校時間なのだから、地下の連絡通路には子どもたちの声が響き渡っている。だが、「Gleis 17」(17番線)に向かう階段を上ると、子どもたちの声はまったく聞こえなくなった。

緑に囲まれたホームは、郊外ののどかな風景そのもの。
遠くで電車が行きかう音以外は、ときおり鳥の声が聞こえるだけ。
しかし、この場所の意味を知れば、
穢れを知らぬさえずりさえも
悲劇を強調するかのよう響く。

ゆっくりとひとつひとつに記載された文字を追いながら歩くと、
ホーム一面に敷き詰められた鉄板に圧倒される。



saita (c)

何も言葉はいらなかった。
実際に戦争を体験し、膨大な知識を詰め込んでいる立花先生も、
ドイツのことばかり研究している私も、
ベルリンの壁も冷戦もよく知らない「こねこ」も
同じように感じていた。
無数の板が語ってくれる、ここで起きたことを。

歴史と記憶を次世代にとどめる場所とは、こういうものなのかもしれない。

「感じる」場所。

アウシュビッツでも中谷さんはこう語っていた。

アウシュビッツで何が起きたかという「情報」ばかりを入れるだけでなく、
やっぱり想像力と感じるが必要なのです。

当時、あれだけ優秀な人がいて、ブレーキがかけられなかったわけですから。

博物館を回って、何か寒気を感じたとか、そういった直観的な感じ方っていうのが、
やっぱりどっかに必要なのですよね。

先生も、階段を降りるときになにか感じたようだ。

翌日、クラカウに集合したツアーの参加者にこう話された。



ホームに向かう階段途中にある 17 番線ホームの説明プレート sano (c)

「1941 年-1945 年にかけてドイツ帝国鉄道の列車により死の収容所へと運ばれたことを記憶
するために 1998 年 1 月 27 日ドイツ国鉄」ちなみに 1 月 27 日はアウシュビッツの解放
記念日である。

突然、足が重くなったのね、あの階段を降りるときに

自分でも信じられないぐらい足が重くなって、

まるで何かにとりつかれたみたいな感じに

ヨーロッパはどこにいてもユダヤ人の残骸みたいなものがある。

プラハ、クラカウのユダヤ人地区……

移動するだけでユダヤ人問題を追っているようだ。

どうやら私は、
自分が最初にアウシュビッツを訪れたときのような衝撃を
立花先生に味あわせてらしい。

そしてアウシュビッツに行く前に、
冷戦の記憶から、先の大戦の歴史の記憶へと、
「古ねこ」立花隆の興味を戻すことができたようだ。

同じくベルリンから東方に旅立ち、
二度と戻ることのなかったユダヤ人たちの想いが、
17番線ホームに宿っていたのかもしれない。

俺たちの無念さとともに、立花隆をアウシュビッツに連れてゆけ、
日本人に俺たちに起きたことを伝えろ、
二度と繰り返すことのないように、と。



フリードリッヒシュトラッセ駅にある碑 「生への列車、死への列車」 saita (c)